

## 保育者養成校におけるピアノ指導に関する一考察 －「音楽の要素」「演奏の技能」を観点に指導方法の比較を通して－

中村 紗和子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2014年11月13日受付、2014年12月18日受理)

### 要 旨

保育者養成校におけるピアノ演奏および弾き歌い指導は、ピアノ初心者やピアノ経験の少ない学生も多い中、限られた時間で保育現場に必要な技術を効率よく習得させていかなければならない。しかし、実際の指導において音楽的な知識や基礎技能をどこまで取り扱うかといった境界線は曖昧で、指導内容は各教員の裁量に委ねられていることも少なくない。そこで、その“曖昧さ”を少しでも明確化する目的で、本研究では、保育者養成校におけるピアノ演奏及び弾き歌い指導について「音楽の要素」「演奏の技能」の観点のもと、比較・分析をおこなった。この「音楽の要素」「演奏の技能」とは、ピアノや歌を演奏する上で必要な音楽の知識・技能に関する分類のことを示し、筆者自身がおこなったものを指す。その結果、指導法は教員ごとに様々であることがわかった。課題として、教員の指導方法を決定づけるのは、他にどのような要因が関係しているのか究明していくこと、また、保育者養成校のピアノ演奏及び弾き歌いの指導において必要な「音楽の要素」「演奏の技能」を明らかにし、教員間で共通理解することが挙げられた。

### はじめに

本稿は、保育者養成校におけるピアノ演奏および弾き歌いの指導の中でも、特に教員に焦点をあて研究をおこなったものである。

保育現場に求められる音楽の能力については、これまで様々な先行研究で明らかにされてきた。しかしながら、その研究の対象は多くの場合、保育者や学生に向けられており、保育者を指導する立場の教員に必要な音楽の能力についてまではあまり触れられていない。安田・永尾(2010)は、保育者養成校のピアノ指導に関する論文を抽出し、様々な観点をもとに分析をおこなった研究において、「カテゴリ『調査対象』」の各研究ラベルが論文全体に占める割合を見ると、関心はほとんど学生に向かっている。反対に、教員、つまり自分たちは関心の対象になっていない。従って、教員について保育におけるピアノ教育の専門性や適正についてはほとんど関心が払われていない。この無関心は、例えば保育での子どもの音楽表現

活動でピアノが果たす機能について、教員に考察が欠けていることの現れと解釈することも可能である。いずれにしても、ここに関心の偏りがある。」と指摘している。また、その他の先行研究においても、ピアノ演奏の指導方法に関するものは数多く見られるが、養成校の教員に必要な指導能力に関する研究はあまり見られない。このような現状をふまえ、本研究では、保育者養成校の教員に求められるピアノ指導の能力について考察する。そして、実際の保育者養成校ではどのようなピアノ演奏及び弾き歌いの指導または指導方法がおこなわれているのか、比較・分析していく。

## 1. 各教員に求められる音楽の能力、ピアノ演奏および弾き歌いについて

本章では、幼児や保育者に求められる音楽の能力、ピアノ演奏及び弾き歌いの能力を通して保育者養成校の教員に必要なピアノ演奏および弾き歌い指導の能力について述べていく。

### 1.1. 保育者に求められる音楽の能力とは

幼稚園教育要領解説(2013)を見ると、幼児の音楽活動に求められる基礎技能は、「第2章ねらい及び内容 第2節 各領域に示す事項5. 感性と表現に関する領域『表現』」に示されている。(4)には「感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」と記述されており、「幼児の思いを音や声、身体の動き、色や形などに託して、日常的な行為として自由に表現できるようにすることが大切である」と示されている。また、(6)には「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」と記述されており、「幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って楽しんだりして、その心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる」と示されている。以上のことから、保育者に求められている音楽の能力は、幼児が発した言葉、動かした体のリズムをその場でくみ取り、それらを生かしながら音楽活動を進めること、また、幼児に様々な音楽のよさを味わわせることが重要であり、そのためには保育者自身が音楽についてある程度専門的な知識を身につけておく必要がある、と理解できる。さらに、歌唱やリズム楽器を使った音楽活動が求められており、音楽の中でも幅広い分野の基礎技能を習得しておかなければならないということも解釈できる。

### 1.2. 保育現場でピアノを取り扱うことの重要性

次に、保育現場でピアノを取り扱うことの重要性について触れていきたい。現在、保育の現場において、ギターやリコーダーなど様々な楽器を用いた音楽の指導がおこなわれているが、斉藤(2013)は「ピアノは強弱の幅、音域の幅もともに大きい上、音の高低やハーモニー

の構成が視覚的にはっきり確認でき、音楽の基礎の把握が格段に容易であるし、歌の伴奏のほかにも、劇遊びやお話などの、効果音としての扱い等、非常に守備範囲の広い便利な楽器だといえる。」と述べている。近年現場でよく取り入れられているリトミックの分野でも、多くの場面でピアノを用いて指導が展開されている。また、先述した保育者に求められる音楽の能力も、ピアノ演奏や弾き歌いによって育むことができると考えるため、本研究では、保育者に求められる音楽の能力の中でも、特にピアノ演奏および弾き歌いの能力について取り扱うこととする。

### 1.3. 保育現場に求められるピアノ演奏および弾き歌いの能力とは

では具体的にどのようなピアノ演奏・弾き歌いが保育の現場では求められているのだろうか。これについては、澤田(2013)の研究において明らかになっている。澤田はピアノ演奏および弾き歌いに必要な能力について、以下のとおり8つの項目に分類している。

- (1)子どもの声や動きから、音程や音域、速さやリズム、強弱等をききとり、それをピアノにおいて模倣する、あるいはおきかえる力
- (2)自らの声や動き、体の中にあるリズムを感じとり、それをピアノの音程や音域、速さやリズム、強弱等で表現する力
- (3)子どもや自らがもつ様々なイメージや心の動きを、ピアノの音程や音域、速さやリズム、和音、強弱等によって即興的に表現する力
- (4)楽曲から曲想やリズム感、フレーズ感を感じとり、それを豊かなイメージをもってピアノで弾いたり、弾きながら歌う力
- (5)子どもが歌うことの心地よさを感じることができるよう、子どもの息遣いや姿から適切な速さとフレーズ感を感じとり、音量のバランスにも配慮して伴奏する力
- (6)自らの演奏技術や楽器の構造、音の原理、奏法等を把握し、子どもが理解し、共感できるようにやさしく具体的に紐解く力、そしてそれを園の教育方針や、日常的な保育において子どもの発達をかんがみながら適応的に用いる力
- (7)ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調を中心とした各音階と主要三和音、及びその構成和音となるC、F、G、D、A、Bのコードネームのしくみ、転回形、七の和音を理解し、演奏する力
- (8)子どもの音楽体験を充実させるため、わらべ歌や童謡、クラシック曲など、様々な曲を演奏する力

澤田は(1)(2)(3)の能力について「楽曲を前提とせず、子どもや保育者自らの声や動き、イメージや心の動きをピアノで表現する力」と位置づけている。つまりこれは、既存の楽曲を使用して音楽活動をおこなうのではなく、場面に合わせて即興的に、例えば効果音のようにピア

ノを演奏する力であると考えることができる。(4)(5)の能力については、「楽曲を前提として、楽譜や子どもの姿から読みとり、感じとったものを演奏に生かす力」と位置付けている。つまりこれは、楽譜通りに演奏するだけではなく、音楽を再現する際に音色やフレーズ感等、一音一音にこだわりをもち、より豊かな演奏をおこなう力であると考えることができる。(6)の能力については、「自らの演奏技能、楽器学的な視点等を子どもたちの発達に沿って用いる力」としている。現在の幼稚園・保育所においては、マーチングや和太鼓など一斉の音楽活動を取り入れている園は多く見られる。また、生活発表会等でも、音楽が多くの場面で使用されている。その指導をおこなう際にも、ピアノ演奏で育んだ読譜力や楽典の理解に基づいたピアノ伴奏、または他の楽器の演奏技術が求められる。このことについて澤田は、「2つの方向性が考えられるが、ひとつは自らの技術をそのまま生かし、背景としての音楽会や鑑賞会にて演奏をすること、もうひとつは自らが身につけているピアノや他の楽器の技術能力を、子どもが理解し、共感できるようにやさしく具体的に紐解き、大切な要素を把握、抽出して子どもたちに伝える」能力とも言い換えている。(7)については「自由でより豊かな伴奏をするための力」としており、音楽の能力の中でもより専門的な知識に関する能力であると考えることができる。(8)については「曲のジャンル、レパートリーに関する力」としている。

#### 1.4. 保育者養成校の教員に求められる音楽指導の能力とは

保育者養成校におけるピアノの指導は、最大で大学なら4年間、短期大学なら2年間である。しかし、現実的には他のカリキュラムとの兼ね合いにより、すべての学年にピアノ指導の時間を位置付けることはできない。本専攻においては、2年次前期に「器楽基礎」と3年次後期に「器楽応用」の計1年間をピアノ演奏及び弾き歌いの授業として開講している。ここでは、受講する学生の能力には個人差があり、初心者やピアノ経験の少ない学生も多く、一人一人の音楽経験や能力に合わせた柔軟な指導が求められる。そのような現状を考えると、保育者養成校の教員はピアノ演奏及び弾き歌いについて短期間で効率よく、学生それぞれに合った指導をおこない、より多くのことを学ばせることが重要であるといえることができる。小学校や中学校の学習指導要領には、音楽科として取り扱うべき目標やねらい、音楽の諸要素など示されている。しかし、保育者養成校では取り扱うべき音楽の諸要素等が明記されたものは見当たらない。初心者やピアノ経験の少ない学生が多い養成校の現状で、ピアノ演奏や弾き歌いを学ばせる際に、音楽の諸要素や楽曲の中で何を取り扱うのか、明確な指導方法や目標は必要であると考えられる。そこで、実際の現場ではどのような指導法がおこなわれているのか「音楽の要素」「演奏の技能」の観点のもと分析し、保育者養成校のピアノ指導の在り方を考えていく契機としたい。

## 2. ピアノ演奏および弾き歌い指導の実践

### 2.1. 本学における器楽の授業の位置付け

今回対象として扱った「器楽基礎」を、本専攻では「子どもの感性と表現を豊かにするために、幼児教育の現場で必要とされる、ピアノ演奏技術を修得することを目的とする。ピアノ演奏のための基礎技術を身につけるとともに、ピアノ実技演習を通して音楽的な基礎知識（コードや簡単な楽典等）を学び、表現力を養うことを目標とする」と位置づけている。「器楽基礎」は10名の教員が担当している。毎年教員の共通理解を図るため申し合わせをおこなっており、一人あたりのレッスンの時間を平等にとること、弾き歌いの曲については歌唱の指導もおこなうこと、コードについて説明をおこなうこと、練習においてはメトロノームの使用を推奨することを事前に伝えている。

### 2.2. 研究の概要

本研究では担当教員6名の協力のもと、指導法を比較した。専門としている楽器、実際の幼児教育現場での指導経験、指導年数等は教員によって様々である。学生は2年生を対象とし、授業観察を通して教員の言葉がけを音楽の要素・演奏の技能の観点のもと分析した。ここでいう音楽の要素・演奏の技能とは、ピアノ演奏や弾き歌いで必要とされる音楽的な知識や奏法について筆者自身が分類したものを指す。保育者に必要だと思われる知識や基礎技能だけでなく、ピアノや歌を演奏すること全般において必要な知識や技能別に分類している。また、言葉がけの内容もあわせて示す。詳細は表1、2の通りである。

表1 音楽の要素

音楽の要素	言葉がけの内容
音部記号・音高	ト音譜表、ヘ音譜表の読み方、鍵盤の位置に関する内容。
音符・休符・リズム	音価、音やリズムの読み間違いに関する内容。
拍・拍子	拍の流れ、強拍と弱拍に関する内容。
速度	速度に関する内容。
強弱	ダイナミクスに関する内容。
調・和音記号	調性感、I、IV、V度の和音記号に関する内容。
コード	コードネームに関する内容。
アーティキュレーション	スタカート、テヌート、アクセントなど奏法に関する内容。

表2 演奏の技能

演奏の技能	言葉がけの内容
姿勢	重心, 椅子の高さ, 座る位置, 体重移動に関する内容。
腕の動き	肘の角度, 手首の角度に関する内容。
脱力	腕の力の抜き具合に関する内容。
指のタッチ	指の立て方, 寝かせ方に関する内容。
指番号	指番号の正確さ, 付け方に関する内容。
ペダリング	ペダルの踏み方に関する内容。
視線移動	読譜の際, 鍵盤を見る際の視線移動に関する内容。
発声	口の開け方, 体の使い方, 声の響きに関する内容。
音色・音質・表現	音色, 音の質, 楽曲のイメージに関する内容。
歌詞	言葉の意味, 母音と子音に関する内容。
声の大きさ	歌声の大きさ, 伴奏と歌声のバランスに関する内容。
音楽の流れ	最後まで止まることなく演奏すること, テンポキープ, フレージングに関する内容。

## 2.3. 研究の実際

### 2.3.1. 「音楽の要素」「演奏の技能」の比較

図1は「音楽の要素」「演奏の技能」のどちらに指導の重点を置いているかについて分析したグラフである。これについては、教員自身の専攻としている楽器や指導の経験年数、大学での専攻により、指導方法に違いがあるのではないかと考えていたが、そこでの違いは見られなかった。例えば、教員BとCは、指導経験年数、大学での専攻にほとんど違いはない。しかし、教員Bは「音楽の要素」に関して18%の指導を行っているのに対し、教員Cは83%という結果となり、大きな相違があった。しかし、指導者Cをのぞくと、演奏者を養成する大学出身の教員A,B,Dは、「演奏の技能」に関してそれぞれ58%, 82%, 58%の指導をおこなっており、「演奏の技能」に重きを置き、指導をおこなっている可能性が考えられる。また、教員を養成する大学出身の教員E,Fは「音楽の要素」に関してそれぞれ66%, 67%の指導をおこなっており、「音楽の要素」に重きを置き指導をおこなっている可能性が考えられる。

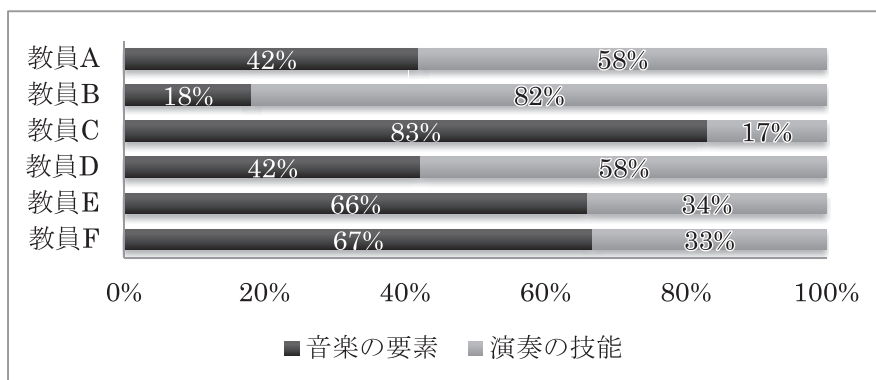


図1 「音楽の要素」「演奏の技能」の比較

### 2.3.2. 項目別の比較

#### (1) 「音楽の要素」「演奏の技能」別の比較

次に、各項目別に見てみると、指導内容は様々だということがわかる。「音楽の要素」(表3)を見ると、例えば教員Aは、「音符・休符・リズム」に関する内容を54%指導している。また、教員Dは「強弱」に関して61%指導している。「演奏の技能」(表4)に関しては、教員ごとに重視している内容にさらに差があることが示された。なお、この統計は「音楽の要素」「演奏の技能」それぞれを100%とみなした際の値である。

表3 「音楽の要素」 教員別の比較

	音高 音部記号・	リズム 音符・休符・	拍・拍子	速度	強弱	調・和音記号	コード	アーティキュレーション	合計
教員A	4%	54%	8%	15%	0%	4%	15%	0%	100%
教員B	30%	20%	20%	0%	0%	20%	0%	10%	100%
教員C	5%	62%	10%	0%	0%	13%	8%	3%	100%
教員D	0%	12%	2%	0%	61%	12%	0%	12%	100%
教員E	0%	48%	14%	9%	3%	7%	2%	17%	100%
教員F	0%	38%	3%	0%	31%	0%	0%	28%	100%



表4 「演奏の技能」 教員別の比較

	姿勢	腕の動き	脱力	指のタッチ	指番号	ペダリング	視線移動	発声	・表現 音色・音質	歌詞	声の大きさ	音楽の流れ	合計
教員A	0%	6%	0%	11%	14%	0%	31%	0%	22%	3%	0%	14%	100%
教員B	2%	18%	7%	62%	2%	0%	0%	0%	7%	0%	2%	0%	100%
教員C	0%	0%	0%	0%	88%	0%	0%	0%	0%	0%	13%	0%	100%
教員D	0%	4%	0%	7%	2%	11%	0%	0%	54%	5%	18%	0%	100%
教員E	3%	0%	0%	67%	3%	0%	0%	3%	7%	0%	0%	17%	100%
教員F	56%	0%	0%	13%	0%	0%	0%	0%	6%	0%	25%	0%	100%

## (2)「音楽の要素」の各項目の比較

「音楽の要素」に関する各項目別の比較は図2から図9のとおりである。なお、この統計は「音楽の要素」「演奏の技能」を合わせて100%とみなした際の値である。まず、どの教員も必ず「音符・休符・リズム」(図2)「拍・拍子」(図3)については指導をおこなっていた。これらは主にピアノを演奏する上で必要な読譜の能力に関連した指導で、対象となった授業にピアノ初心者や経験の少ない学生も多いことから、このような結果になったとも考えることができる。また、全項目中、3人の教員が、授業を通して一番多く取り扱っていた要素は「音符・休符・リズム」であった。

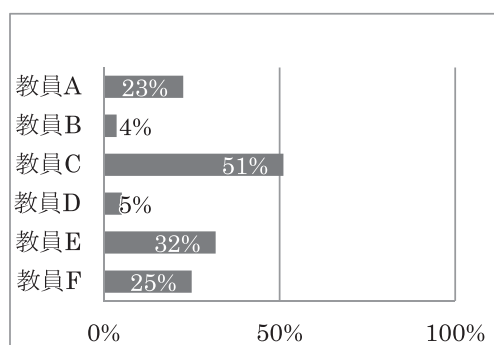


図2 音符・休符・リズム

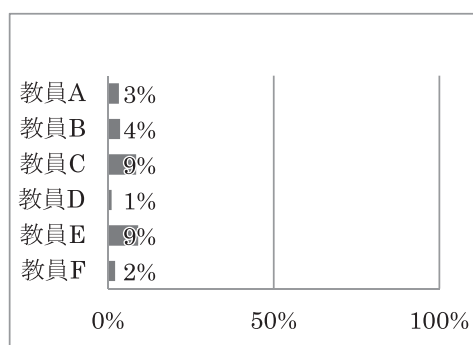


図3 拍・拍子



「速度」(図4)については、各教員ともあまり指導はおこなっていなかった。「コード」(図5)についても、あまり指導がなされていなかったが、授業観察をおこなった際の曲目が、コードが必要な楽曲であるかどうかの違いがあるため、このような結果となった。

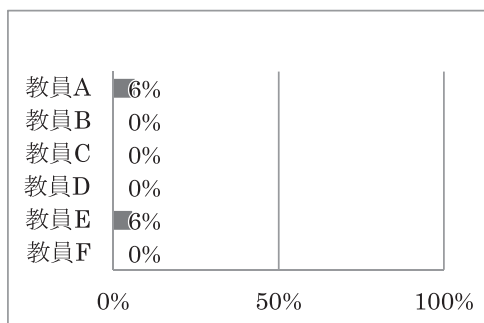


図4 速度

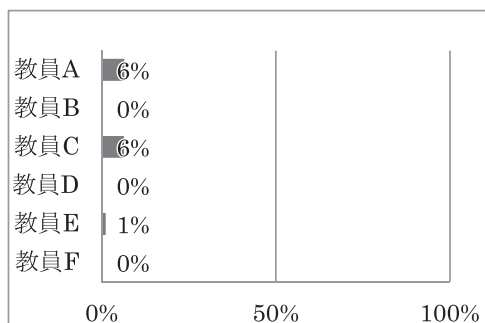


図5 コード

また、「音部記号、音高」(図6)について指導をおこなった教員は、「強弱」(図7)についての指導はおこなっておらず、「強弱」について指導をおこなっている教員は「音部記号、音高」について指導をおこなっていない、という結果が見られた。これには、教員が指導において、音楽の構成要素を重視しているのか、表現要素を重視しているのかで違いがあるのではないかと推測できる。

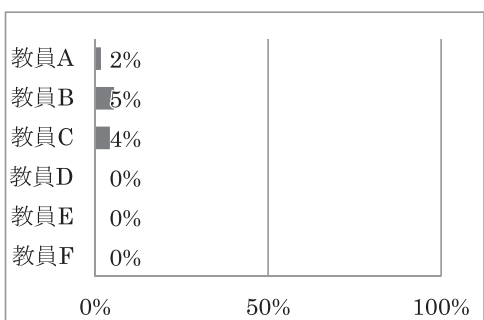


図6 音部記号・音高

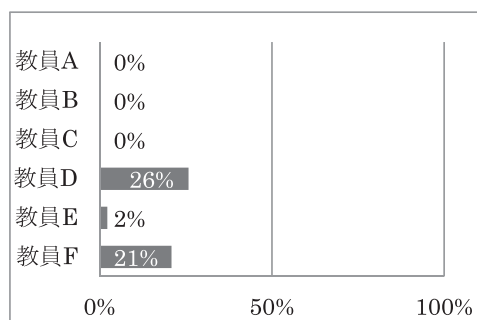


図7 強弱

「調・和音記号」(図8)「アーティキュレーション」(図9)については、ほとんどの教員が指導をおこなっていたが、教員により比重は様々であった。

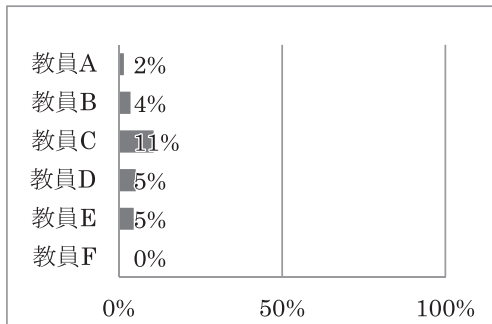


図8 調・和音記号

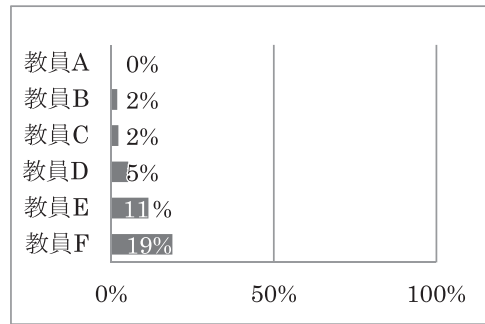


図9 アーティキュレーション

### (3)「演奏の技能」の各項目の比較

「演奏の技能」に関する各項目別の比較は図10から図21のとおりである。「姿勢」「腕の動き」「脱力」(図10, 11, 12)についても、教員により様々な差があることがわかった。

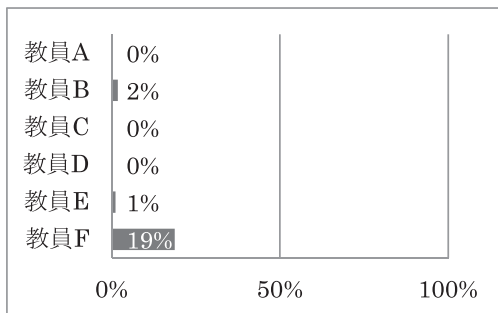


図10 姿勢

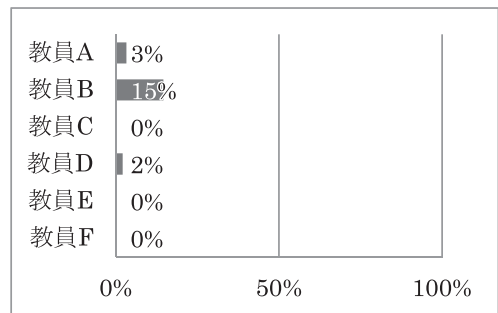


図11 腕の動き

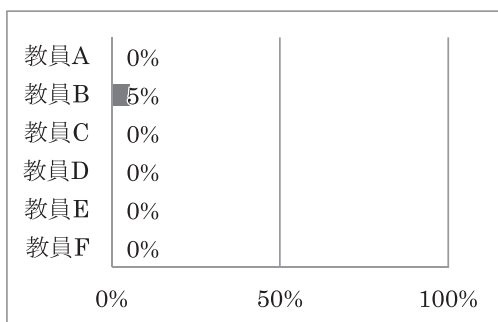


図12 脱力

全項目の中で一番差が大きかったのが、「指のタッチ」(図13)だった。教員Bは指導の約半分を指のタッチに当てたのに対し、教員Cは、一度も指のタッチについては触れていない。

「指番号」(図14)は音楽の構成要素を重視していると推測される教員が特に指導をおこなっていた。

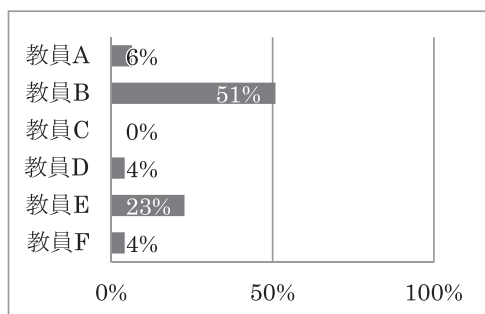


図13 指のタッチ

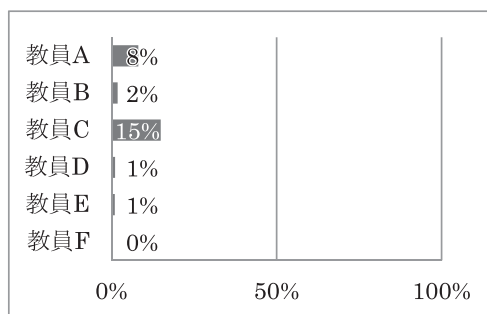


図14 指番号

「ペダリング」(図15)については、ほとんどの教員が指導をおこなっていなかった。これも授業観察をおこなった際、課題曲にペダルが使われていたかそうでないかに違いがあるため、このような結果となった。「視線移動」(図16)については、教員Aのみ、指導をおこなっていた。

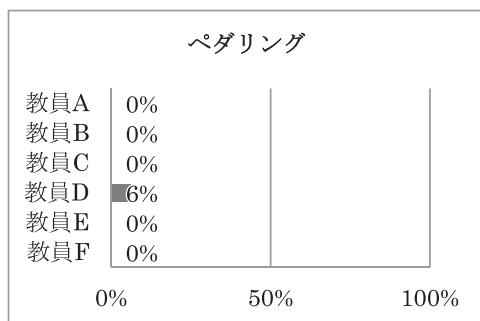


図15 ペダリング

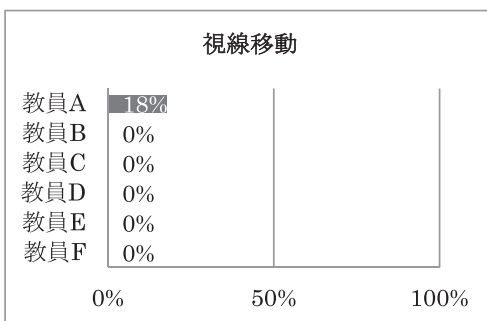


図16 視線移動

「発声」(図17)「歌詞」(図18)については、どの教員もほぼ指導をおこなっていない。

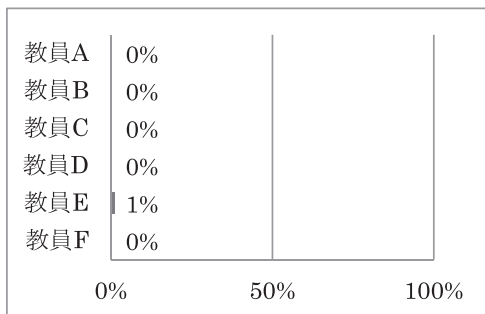


図 17 発声

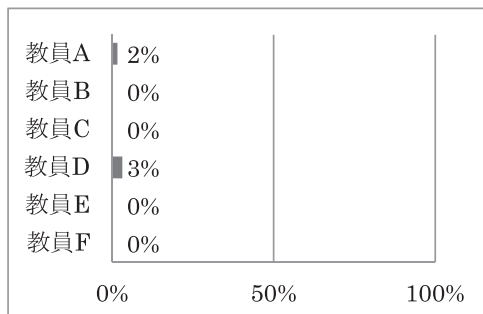


図 18 歌詞

「音色・音質・表現」(図19)も様々だった。「声の大きさ」(図20)も重視している教員とそうでない教員に分かれた。「音楽の流れ」(図21)についてもあまり指導がなされていないかった。

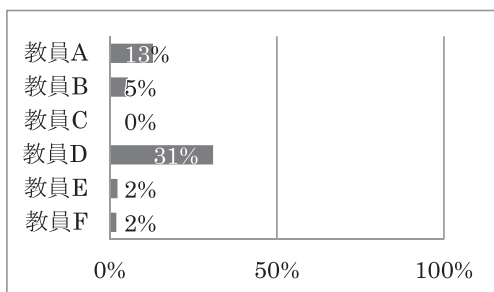


図 19 音色・音質・表現

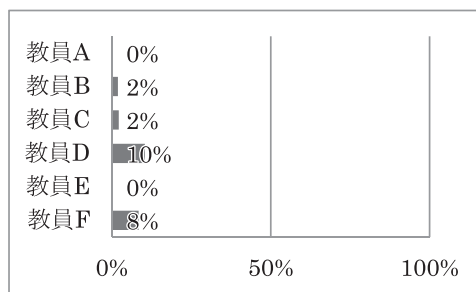


図 20 声の大きさ

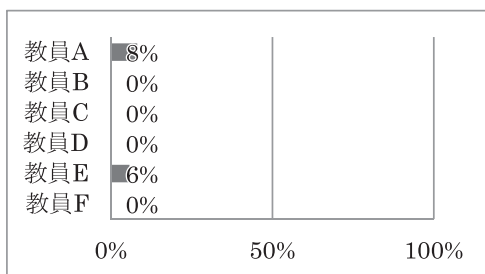


図 21 音楽の流れ

## 2.4. 考察

今回行った研究は、先で確認した保育者に求められるピアノ演奏および弾きうたいの能力の中でも、特に「楽曲を前提として、楽譜や子どもの姿から読みとり、感じとったものを演奏に生かす力」に関連したものである。ピアノ演奏および弾き歌いをするににおいて必要な「音楽の要素」「演奏の技能」を観点に挙げ、保育者養成校におけるピアノ演奏および弾き歌い指導の実際について分析をおこなった。その結果、教員ごとに指導法は様々であり、全体を通して一番多く指導なされていた内容は「音符・休符・リズム」であることが示された。そして、指導回数に一番差があったのは「指のタッチ」についてであることが示された。この能力一つをとっても、教員の指導内容に違いがあることがわかったが、保育現場では「楽曲を前提とせず、子どもや保育者自らの声や動き、イメージや心の動きをピアノで表現する力」や、他にも求められるピアノ演奏および弾き歌いの能力が多様にあるため、より一層指導内容を精査していく必要があるだろう。また、授業観察の後、各教員におこなったアンケートにおいて、教員にも“迷い”があることがわかった。アンケートの内容は、「音楽の要素」「演奏の技能」の各項目をあげ、保育者がピアノ演奏および弾き歌いをおこなう際必要であると思う項目を“とても必要だと思う”“やや必要だと思う”“あまり必要だと思わない”“必要だと思わない”の4段階で回答を得るものであった。その中で、例えば教員Aは「視線移動」に関して指導を数回おこなっていたが、アンケートにおいては“あまり必要でない”と回答していた。この“迷い”を無くし均一化を図るためにも、保育者養成校のピアノ演奏および弾き歌い指導は、方向性を持ち、指導内容を定めていく必要があるのではないだろうか。

## おわりに

今回は、保育者養成校の教員に焦点を当て研究をおこなった。今後は、「音楽の要素」「演奏の技能」を観点として、保育現場の実態を分析したい。そして、保育者に求められる音楽の能力をふまえ、保育者に必要な「音楽の要素」「演奏の技能」について明らかにしたい。また、それを教員間で共通理解し、保育者養成校でより有意義な指導を展開していきたいと考える。

## 引用・参考文献

- 安田寛, 長尾智絵(2010)「『保育におけるピアノの流行』と保育者養成機関ピアノ教員の関心の在り方との関係について」『奈良教育大学研究紀要第59巻』第1号71-78
- 文部科学省(2013)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 158-174

- 斉藤美和子(2013)「保育者養成校におけるピアノ指導の現状と課題」『人間生活学研究第4巻』71-77
- 澤田まゆみ(2013)「保育士・幼稚園教諭に求められるピアノスキルとは何か」『新島学園短期大学紀要第33号』57-66
- 菅裕(2012)「吹奏楽、独奏楽器、声楽指導における熟練指導者の音楽表現に関する指導方針」『宮崎大学文化学部附属教育実践センター研究紀要』153-167
- 奥千恵子(2013)「保育者養成と演奏技法(Ⅱ) - ピアノ初心者対象の入学前教育の取り組み - 」『四天王寺大学紀要第55号』325-342
- 中野研也, 河野久寿(2012)「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」『仁愛女子短期大学研究紀要第44号』71-79
- 北村恵子, 平澤節子(2009)「幼児教育者養成における器楽教育について」『上田女子短期大学紀要第32号』97-108

**Comparison of piano teaching methods in  
preschool worker training schools  
—An "elements of music" and "performance skills" perspective—**

Sawako NAKAMURA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

**Abstract**

Instructors in training schools for preschool workers must teach the piano skills necessary for the preschool setting quickly and efficiently because many students have little experience or are beginners. However, since education content is often left to the discretion of the individual teacher, it is uncertain what basic knowledge and elements of music are covered. In this study, we compare and analyze teaching methods from the perspective of elements of music and performance skills in order to shed light on this uncertainty. We identify and classify the musical knowledge and skills currently used in instruction. Results show that each instructor chooses to emphasize a variety of different contents regardless of student experience. We investigate what factors determine the contents chosen by teachers and clarify what performance skills and musical elements are necessary for the preschool environment.

**Keywords :** piano, playing the piano with singing, preschool worker training schools